313 回 佐々木 市賀

宝暦九年三月市村座に市蔵の上調子

314 回 佐々木 長蔵

宝暦十三年二月市村座に市蔵の上調子を古流と交互に勤む、その後明和五年二月市村座に古流の上調子

315 回 佐々木 友蔵

明和二年正月中村座に三代目幸八の上調子を勤む

316 回 初代 岸澤九蔵

明和六年十一月中村座に初代古式部の上調子を勤め以後ほぼ出演あり、天明二年十一月森田座には芳太夫のタテ三味線を勤め天明四年十一月森田座には大和太夫のタテを勤む

317 回 岸澤吉蔵

明和五年市村座額見世番付に佐々木吉蔵と云う名上調子の控に見申るは三人かて即ち佐々木古流の弟子なりしを古流分離の時に古式部に従いしならん、明和六年十月中村座上調子の控明和七年正月市村座に初代古式部の上調子その後ほぼ出演あり、初代九蔵と同格なり

NO.
DATE

27

NO.
DATE

318

回 岸澤市五郎　後に芦船

明和八年十一月中村座に初めて初代古式部の上調子を勤め常後
芝居出勤なきも後タテ三味線格となる。天明六年二代目文字太夫
拍露浚いに岡太夫のタテを弾く、後に芦船と改名す常年忠

319

回 初代岸澤市藏

天明元年三月中村座に初代古式部の上調子を勤め以来西三回出勤
あり、文化七年頃までその名番附に見る

320

回 岸澤總吉　後に文車

天明元年七月森田座に芳太夫のタテを勤む

321

回 二代目岸澤式佐　初め 初代市治、二代目古式部

初代古式部の高弟なり 宝暦三年生 初名市治、明和八年十月
中村座にて信花部則国に初代古式部の上調子の格に出でるも芝居
出勤の始めにして、天明三年九月中村座に始めてタテ三味線(師古式
部出勤の差支しも病気欠勤なれば)天明三年九月初代死去するに
及び翌四年正月中村座にて二代目式佐を襲名し、初代鳥羽屋
里長と相互にタテ三味線を勤む、寛政七年十二月
都座にて二代目古式部と改め、更に文化十三年五月初代古式部
追善上るり「虞美人雨」にて二代目岸澤右和佐となる、門弟に二代目
式佐を継がせ一文藏式佐の文政三年以後退隠死亡するに自ら名
劇場に出勤、タテ三味線を勤めたる文政六年十一月十六日死せり

㊁ 邦樂年表には三代目古式部とあれど誤りなり

㊂ これも年表には二代目古式部改めとあれど二代目にて初世古式部の追善なり。即ち年表は二世と三世を誤り伝えたるものにて「老の戲言」に曰く

「初世式佐（これも二世の誤）は寛政の中頃より（即ち寛政七年十一月なり）二代目古式部と改め三代目文字太夫、三代目兼太夫、其の後文政二年迄の間なりは皆この古式部の節付なり」とあるによって明らかである。即ち三世古式部となる長文蔵式佐は、古式部を継ぎ文政三年十一月に芸能出勤せしのみで間もなく死去したので二世と三世が転倒するに至ったのである。

△作曲「子宝」「雷が鶴」「三人坊主」「水売」「三勝」「願人坊主」「大和国」「浪太」「女房踊」「うぶめ」等

322 㗊 佐々木蘆吉　後、岸澤蘆吉

天明三年二月市村座長唄の上調子、後岸澤の弟子となり安政十年十月中村座に二世古式部の上調子を勤め後西三回出勤あり

323 㗊 岸澤萬蔵

天明三年十月森田座に初代九蔵の上調子、その後出勤なく寛政十二年八月辰松座に二代目古式部の上調子、その後なし（故澤萬蔵と同人か）

324 㗊 初代 鳥羽屋里長

元文二（或いは三）年上總に生る。里市と称し宝暦四年十七才にて江戸（春日町）里長の名跡を継ぎ番附に見えたるは天明三年八月市村座に初代古式部と並べてタテ三味線格にあたるを始めとす（富本には天明元年十一月市村座「課当君逢坂」にその名あり）彼はこれまでの役をさいたか

明らかならず、手按するに宝暦八年十月市村座に初代佐野市蔵の上調子を勤める里夕は同人にて里夕改め里長となりしなるかとも推せらるれど確証なければ断言する事を得ず、彼天明寛政度に常磐津富本にまたがりし作曲の名人にて当時節付の至難なるものは彼に委嘱せりと云う、彼寛政三年十月の原崎座に三代目文字太夫の絃を勤めしを限りにて常磐津を脱し富本に入る、寛政四年正月三十九日常磐津門弟惣字会（常磐津年表）「この節、鳥羽屋里長、破談の子須賀太夫申潔す」とあれば彼の交渉通じまとまりしものの如し

作曲中著名なるものには「おふさ徳兵衛道行」「修羅衣」「国の華」「天江山四天王」「庚寅」等、特に「おふさ徳兵衛道行」は上方中最上なりと岸沢三蔵は称讃せり

325

岸澤亀石

天明三年十月森田座の「夜東雪雛入」に芳太夫のタテを弾く

同座額見世番附にも記載あり

326

三代目鳥羽屋里長　始め里桂、次に故澤里慶

初代里長の弟子、初名里桂、天明三年八月市村座道成寺道行に初代里長の上調子を勤めし以後里長に従ひ上調子出勤す、翌四年森田座額見世番附には常磐津芳太夫のタテに掲載、寛政四年正月師里長常磐津と絶つて居残りて同五月の原崎座に故澤里桂と改名してタテ三味線となり三代目式佐と並び三代目文字太夫三代目薫太の絃を勤め寛政七年八月の原崎座より再び鳥羽屋里慶となり翌八年十月都座に三代目里長を継ぎ寛政十年正月中村座出勤を

最後に三月一日の三代目里久、三代目里桂と共に常磐津を去て富本に入る

〈作曲 忠信・松魚貫・業平〉

327 鳥羽屋兵助

天明三年十一月三日「夜東雪雖入」下の巻に初代里桂の上調子、天明七年四月中村座には二代目式佐の上調子等を勤め居たるも寛政六年以富本に入り富本兵助となりタテ三味線格となる

得寿斎の三代目徳治の妻より聞き伝へ談に曰はく この人の掛声は大きく芝居の外まで聞こゆと云ふ

328 初代 岸澤金蔵（一寛政五）

初名金弥 須賀大夫の三味線弾きなり。その芝居出勤の初めは天明四年十一月森田座に二代目九蔵（後三代目式佐）の上調子を勤めし時なり。その後も出勤あり。寛政五年五月十二日武州杉戸に病死す 法号道心信士

329 鳥羽屋里久

寛政二年六月市村座番附にその名初めて現る。その後初代里桂（二代目里長）に添い上調子となりしばしば出勤。寛政十年二月二代目里長等と富本に転ず。その後文化初年に至り再び常磐津に復帰 二代目古式部の弟子になり文化五年六月森田座に岸澤里久と改めて常タテ三味線格となり同八年まで常磐津にあり。同九年富本に入りしもの歟。